

## ジュビロ U-12 国際サッカー大会 2025

報告者 技術委員長 古杉仁志

4月2,3,4日の3日間でつま恋・エコパ補助競技場にて国内・国外12チームで行われた。競技は11人制で行いピッチは縦90m×横60mでU-12の選手には良いサイズであったと思う。

今回の東京都U-12選抜は都内4種登録チームの約800チーム、6年登録選手約3,000人の中から選ばれた選手たちで所属チームは13チームからの選出とのことだった。ちなみに、東京ヴェルディジュニアは単独での出場のため選抜チームには入っていない。

試合内容から東京都U-12選抜の特出した点として二つ挙げられる。①**サッカーの原理原則への深い理解**と②**基本技術に裏打ちされた中でのスピードへの追求**である。以上の二つのレベルは相当高く、現状の静岡県の手と差は衝撃を受けたほどであった。以下にその詳細を述べる。

### ①サッカーの原理原則への深い理解

普段は行わない11人制サッカーであっても全員がサッカーの原理原則を理解できているため試合の質がとても高いと感じた。つまり全てのプレーがゴールを奪う、ゴールを守るから逆算できているということである。攻撃では相手の背後を取りゴールに向かおうとするプレーには迫力があり、一方組み立てではボールの動かし方も選手たちの中で共通理解ができていると感じた。ただ、後日談として事前練習はたったの一回であったとのことではいかに日常の自チームでの指導が正確に行われているのかということを知ることができた。パス（キック）に関しても球質の違うボールを蹴り分けてしっかりと蹴れていた。守備でも球際は厳しく身体が大きくない選手であっても体幹がしっかりしているのでボールを奪い切れるなど身体の使い方も上手であった。また数的不利な状況でもボールを奪える選手もいてゴール前では身体を投げ出してでも相手を止める、絶対にシュートストップするんだという気持ちが入ったプレーが随所で見られた。

### ②基本技術に裏打ちされた中でのスピードへの追求

「スピード」と一口に言ってもその意味は多岐にわたる。判断のスピード、パス（キック）のスピード、攻守の切り替えのスピード、走力（アジリティ）におけるスピードである。これら全てにおいて質・量ともに他のチームを上回るパフォーマンスであった。それに加えて当然のように基本技術である【止める・蹴る・運ぶ】ができているため最早東京都U-12選抜の結果は自明の理であるとすら言える。特に攻撃から守備になった時の速さ、二度追い三度追いと連続プレーが当たり前に行い全員で連動していた様は素晴らしかった。

また今年の東京都は全日本少年サッカー大会への出場枠が2つあるが20チーム位にチャンスがあるそうで今後の選手の成長に期待ができ、どこのチームが代表になるのが楽

しみである。

東京都選抜のスタッフと大会期間中、色々な貴重な話を聞くことができ非常に有意義であった。このままでは正直、静岡との差は開く一方である。先ずは指導者のレベルアップを図り、支部間の交流を密にして静岡県としてのビジョンを明確にするべきだ。

そもそも一体静岡県が日本のレベルの中でどの立ち位置にいるのかという認識において正確に把握している指導者がどのくらいいるのかということに甚だ疑問を感じる。過去の栄光にすぎり、昔の結果を今の実力と錯覚し、当時の成功体験にいつまでもしがみついているようではいつまで経っても成長は見込めない。こういうことを言うと、「東京と静岡では前提条件が違うから」「結果だけが全てじゃないから」と御託を並べる指導者がいる。そんな指導者に伝えたい。そういう姿勢が全てを物語っているよ、と。言い訳をつらつら並べている暇があったらさっさと過去の栄光と決別しありのままを受け入れるべきだ。静岡という広いようで狭いフィールドの中でどんぐりの背比べをしていないで外へ学びに行くべきだ。価値観やスケールの違いに驚かされるべきだ。そもそも今回の国際大会へ何人の指導者が学びに来ただろうか。どのくらい興味関心を持っただろうか。時間や手間を言い訳に学ぶことを放棄した指導者に子どもたちの未来を預かる資格などない。「学ぶことをやめたら教えることをやめなければならない」のではなかったのか。学んだ結果、これまでの指導が否定されるかもしれない。でもそれでいいではないか。危機感とともに人は成長する。そうしてやっとお尻に火がついた瞬間、静岡の逆襲が始まるのである。さぁ静岡の中の蛙よ、大海へ飛び込もう。